2025年（令和７年）11月18日（火曜日）　山陰中央新報

戦国時代の思いをつなぐ
出雲・斐川の本誓寺　仏像を修復

出雲　石見　鳥取

題字　岸本　彩乃（浜田一中2年）

戦国時代の思いつなぐ

出雲・斐川の本誓寺 仏像を修復

中尾芳山さん（左）が作る新像が仕上がり、笑顔を見せる延本秀道住職＝出雲市内

出雲市斐川町神氷の本誓寺に伝わる戦国の世から地域を見守ってきた木彫りの仏像が、檀家（だんか）らの支えでよみがえった。記録に残る限りでは初の修復で、入魂式が23日に営まれる。

3体ある仏像は16世紀初めごろ、戦国大名・尼子経久が作らせたといわれる。かつては寺の裏手にある仏経山の岩窟に祭られた。

長年外気にさらされて傷み、2018年には麓のお堂に移された。中央の薬師如来像は湿気やシロアリの影響で芯が朽ちて頭がなくなるほどで、当時、檀家でつくる会の副会長だった金山恒義さん(78)＝出雲市斐川町神氷＝らが胸を痛め「どうしても修復したい」と1年前から準備を進めてきた。

損傷が激しい本誓寺の旧像

新像の制作は、彫刻家の中尾芳山さん（出雲市大津朝倉1丁目）に依頼。クスノキを用いた高さ約1メートルの新像には、旧像の木片の一部を収めた。檀家有志25人が計60万円を寄せて費用を賄った。

修復に携わった人の名は棟札や冊子に記録される。延本秀道住職(45)は3体全てを一度に直さず、あえて1体のみを新しくする方針にした。「大事なのは思いをつなぐこと。いつか孫世代が先祖の名を見つけたときに『次の仏像は自分たちで』となるのではないか」と期待する。

金山さんは、少人数で寄贈するより、地域全体で少しずつ費用を出し合う過程を大切にした。「戦国の時代に地域の安寧を願った思いをつなぎたい。この仏様の前に少しでも足を運んでもらえたらうれしい」と願いを込めた。

（今井菜月）